

船 待 ち

—幼き日の追憶の一節—

わ か き 父

▽
たしか初秋の頃と覺えて居ります、母と二人の
長い寂しい海の旅でした。

私が六つの時ですから、明治十九年の事でしょう。越後の海府から函館へ歸る途中、莊内の加茂の親類へ四五日泊つて、其處から三吉丸と云ふ小蒸汽船で酒田へ着き、川前の通りと覺えて居りませんが、中西とか云ふ家の二階に、落着かない宿を取りました。

昔の人がよくしたやうに、母と子とが便りなく此の港で船待ちをする爲めです。

▽
私どもが來た前日に、新潟から酒田、土崎、函

館と寄港して、小樽へ行く郵船會社の定期船が、寄港して居ましたから、船も大きいし、海も極めて平穩であるし、すぐ翌朝たつて行かれると云ふので、二人で大變に悦びました。

どう云ふ原因であつたか、少しも覺えがありません。あんなに用心深い阿母さんが、つい其大切な船に乗り遅れて了ひました。それから毎日船を待つて、半月餘りも待ちわびて、悲しい日を送らなければならなくなりました。

其時に阿母さんと二人で撮つた色の褪めた寫眞などを便りにして、酒田に滞在した時の光景や氣分を辿つて、想ひ出す事の出来る限り、自分の小さい時の姿や心持ちを、今の自分から眺めて見ま

しやう。

▽

乗り遅れた朝の霧のかゝつた川の光景が第一に現れます。白い着物を着て憶病さうに立つて、眉を寄せて沖の方を見つめて居る自分の姿が正面に見えます。又すぐ其傍の少し前の方に、顔を赤くして氣をもんで居る阿母さんが、横向きに成つて動いて居ります。

やがて霧の奥の向うの波の上から、ポーツと云ふ出船の汽笛が軟かに長く響くと、兩脚を投げ出して二階の欄干により懸つた自分の小さい後姿が見えて來ます。最上川から反射して來る湯氣のやうな光が入り込んで、座敷中があたりで一ぱいに成つて、天井と壁にかけて一面に其自分の影法師が大きく眞黒に映り、自分の動く通りに動いて躍るのです。

私は其時、自分の影をなつかしい怪物だと思ひました。

▽

船待ちの日も幾日となく續きました。或日二人で米穀取引所かと覺えて居る建物のあたりを散歩しました。ゆるくうねつた坂に白い洋風の建物と、こんもりした木の繁みとが、快い淡い色で現はれて、長閑な日影がほかくとさして居ります。

併し不思議な事には、人が一人も通りません、又音が何も聞えません。

そして建物と木立とが、次第／＼に小さく成つて退いて行つて、坂が少しづつ歪んで且つ追々に大きく成つて來るのです。

今でも此の光景は少しづつ動いて居ります。

△

或朝、向うの低い暗い家から、何時とはなしに、餅を搗く音が煙のやうに洩れて來て、次第／＼に太い地響を自分の居る二階まで送つてよこします

此日は、雨の降りさうな、陰氣な、遣る瀨ない日でした。小供の心が何物かを求めて止まないや

うな氣分の日でした。

白の重い粘り氣のある音が、大きく幅廣く動いて来て、自分の體を包んで了ふやうで、軟かい、ふく／＼とした、なつかしい味の渴望がどうしても迫つて來ます。長い時間の間、自分は欲しい／＼と云つて阿母さんを困らせました。

▽

古い都のやうな香がして、うす綠色の細いしなやかな雨が、しん／＼と降つて來ます。

室の内は茶色にうす暗くつて、「仕様がな……」と云つたやうな、阿母さんの甘い苦笑ひの顔が、何處かに見えて居ります。

自分は新潟で御土産に貰つた、丸ぐりの表附きの、せいの高い下駄を内輪にはき、身の丈けほどもある長い左の袖を頭から冠つて、嬉しさうに雨の中に立つて居ります。空の暗いわりに足許は不思議に明るく、雨が降つて居ながら、地面は乾いた黄色い色をして居ります。

頭がぬれずに軟かい絲織の着物がぬれて、次第／＼に美しい色が沈んで且つしつとりと硬ばつて來るのが、大變に面白いのでしやう。

土地の風習と阿母さんの好みに従つて、額の生え際を圓く剃りつけ、眉をきれいに拂ひ、頭はふさ／＼したおかつばでした。黄色い翁格子のやうな博多の帯を、胸の上の方にきちんと締め、華やかな淺黄色の廣い附け紐が、帯の下から一面に垂れて、重さうに動いて居る自分の後姿が、はつきり見えて來ます。

焼いた銀杏を誰かに割つて貰つて、中から透き通るやうな綠色の實を取り出して、はにく齧肉でぎし／＼と噛み締めたのも、たしか此の日でした。その故か此の日の雨は、何となく銀杏のやうな感じがします。

▽

船待ちの間は、毎日／＼悲しい日が續きました。どう云ふわけか、其後絶えて汽船が寄港しませ

んでした。それ丈け阿母さんは、先の日に乗り遅れた事を思ひ出しては悔むのでしやう、毎日のやうに、遠い處を見つめては、深い溜め息ばかり洩して居りました。どうかすると不意に自分を抱き締めて、熱い頬ずりをして、遺る瀬ないやうな顔をする事も度々ありました。

其悲しさうなお顔は、今では莊内の紙籬の姿と一緒に成つて了つたやうです——

闇い座敷に、屏風とも襖とも分らない銀色の小さい背景が輝いて、すつと後の方には、かすかな蠟燭の灯が幾つも動いて見えます。じつと見て居るうちに、首をうな垂れた紙籬の形が、少し斜に成つて、其銀屏の前にしよんばりと現はれます。

髪の色や頭の物などはよく分りません。眼の上を少し赤くした青白い瘦せた顔で、眼と眉丈けが悲しみに堪へないやうに、時々動きます。急にこけた肩から下は、更に急に瘦せて居るやうです。たい緑色のやうな着物がほのかに分ります。

やがてぱたりと横に彼方を向いて倒れたやうに成つて、突然、姿が消えて了ひます。

同時に細々とした悲しい歌が聞えて來ます。

▽

長方形に成つて引窓から入つて來る軟かい日影が、妙に斜に歪んで、障子にさして居ります。

馬乘りに阿母さんの膝に抱かれて、御話を聞いて居た自分は、其形が餘り面白いので、一生懸命に見つめて居ります。やがて追々に其日足が下の方に動いて行くのが分つて來ます。

御話がやんで、ひっそりして來ました。

自分がかまつた阿母さんの肩と、自分の乗つた阿母さんの膝と、自分の背中を支へて下すつた阿母さんの手の感じが、活き／＼して居る丈けで、阿母さんの顔も見えません、聲も聞えません。ただ二人とも黒い着物を着て居るのが分ります。

何處かで、だるさうな鶏の聲がします。

淺黄色の濃い雲のやうなものが、すぐ目の前に

ちら付いて、室も障子も阿母さんも、皆んな見えなくなりました。やがて何もかも分らなく成つて了ひました。

眩しい光に眼が勞れたのと、眠く成つた爲めですやう。

▽

いよ／＼定期船が入港したと見えます。

汽船のいやな臭ひと、暗い寒い寂しい海の感じが、限りなく漂うて居ります。

橙色のやうなマントにくるまつた自分は、吸ひ付くやうに阿母さんの膝に抱れて、大勢の船客と一緒に大傳馬の中に混つて居ります。本船へ乗り移り移るには、夕闇の中を川から海へ漕ぎ出して行かなければなりません。此の日は水戸口が非常に荒れて、大傳馬でも中々困難でした。鋼鐵を張りつめたやうな堅い夕空が追々に暗く成つて氣の變り易い人のやうな風が、何方からとなく冷たく吹いて來ます。いよ／＼水戸口まで來たら、餘り

物凄い海の水と川の水の激動と大音響とにおびえて、阿母さんの膝に小さい頭を伏せました。

こわ／＼下から見上げた時は、巨大な魔物のやうに見えた本船も、阿母さんに抱かれて、舷におろした長い梯子を一つ／＼登つて行くにつれて、追々になつかしく成りました。最後に堅い甲板に降り立つた時には、急に心丈夫になりました。

下につないである大傳馬を甲板から見降したら、今まで自分の乗つて居た舟とは思はれない程に、哀れに見すばらしい感じがしました。

やがて船が動き出したのでしやう。

むく／＼と迫つて來る器械やペンキのいやな臭ひと、船が揺れて大きい器具のぶつ付かる音と、推進器のやかましい響などが、内臓を逆にしぼるやうに自分を苦めます。暗い重いランプの懸つた船室の棚に、自分は阿母さんに抱へられて、死人のやうに青ざめて寝て居ります。

○

透明なうす緑色の波が、チロ／＼チヨロ／＼と、陽炎でも立つて居るやうに、軽く微動して居る軟かい海の上を、燕尾服を着た人のやうな感じのする汽船が、自分と阿母さん丈けを乗せて、油のやうに滑かにすべつて行くやうです。

自分はいきれいに洗い抜いた甲板の細長い板目を間違はないやうに踏んで遊んで居ります。不意に、左の方から、胴と尾とが非常に／＼長い小さい黒猫が飛び出して、一生懸命に何かを追ふのでしや

大阪の童謡 (つらき)

二、動作のつける部

一、芋蟲ころ／＼瓢箪ぼつくりこ

數名蹲躑し前の者の肩を持ち歩む

う、閃めくやうにまた見えなくなりました。

やがて太い鏑のある鼻聲で、「小さい！小さい！と自分を呼びかけます。此の聲は遠くから聞える事もあり、又すぐ耳の傍で響く事もあります。其方を見ると、大きい西洋人が、笑ひながらしきりに自分を招いて居ります。何となく恐くつて、うぢ／＼して籐椅子にくつついて居る肩の處から自分を覗き込んで、勵ますやうな眼をして、きまり悪さうに笑つて居る阿母さんの顔もよく分ります

浪花の子守

二、いんじく一二九。にくにく二九二九。さんぐにしごろく三九二四五六。五げんまぶろく三六七八のばちや(合計百となる)

數名手先きを握り親指を内にし差出す。一兒順にこれを押し。

パに當りしもの變ろ。